

[研究論文]

演技の授業におけるジェンダーの影響を考える —日常の「かわいい」キャラと演劇のキャラクターという演技の 二重構造についての考察—

Looking at how gender affects students' acting in acting classes

—Analysis of the two-layered structure in acting with “kawaii kyara”
as the gender norm and the “character” within a play—

松村悠実子

Yumiko Matsumura

All the world's a stage, And all the men and women merely players.

この世界はすべてこれ一つの舞台、人間は男女を問わずすべてこれ役者にすぎぬ

—シェイクスピア「お気に召すまま」2幕7場

小田島雄志訳より¹⁾

〈抄 録〉

ジェンダーの規範がいかに大学での演技の授業において影響を与えているか、主に女子学生の演技を中心に、演技・ジェンダー・キャラ・キャラクター・かわいいをキーワードにそのジェンダーと演技の構造について考察した。

キーワード：演技、ジェンダー、キャラ、キャラクター、かわいい

Abstract

Considering how female students act in acting classes at university, this paper will analyze the relationship between the gender norm and acting using keywords such as “acting,” “gender,” “kyara,” “character,” and “kawaii.”

Keywords: acting, gender, kyara, character, kawaii.

はじめに

この研究は、筆者が大学で担当している科目「演技」の授業での女子学生の「演技」と「ジェンダー」の関係について次のことを感じたことが発端である。まず、演技を始めたばかりの一年生では

男子学生に比べて女子学生の演技に特徴的な傾向が見られた。それは、「演技」をする際の身振りの大きさや動作、声の大きさや出し方などが男子学生と女子学生とではやり方が違い、またそれに対する周りで見ている学生の反応も違うということである。これが単純に私の「印象」だけの問題なのか、学生の「個性」の範囲なのか、もしくは「ジェンダー」の影響があるのか、又は「文化的」な影響があるのか、更にはそれらの組み合わせなのか、興味を持った。

そこで女子学生は「女性」というジェンダー役割をまず演じていて、その上で、「演技」の授業に臨み、更に演劇の登場人物（キャラクター）を演じているという、言わば「演技の二重構造」があるのではないかという仮説を打ち立てた。この仮説を考察するため、「演技」「ジェンダー」「キャラ」「キャラクター」「かわいい」をキーワードに以下の点を挙げ、論証したい。

まず、「ジェンダーを演じている」ということに関して先行研究を挙げ分析する。次に、「キャラ」と「キャラクター」という言葉の意味と定義を述べ、更に日常での「キャラ」と演劇における「キャラクター（登場人物）」に関して論じる。次に「かわいい」という概念とジェンダーについて述べる。更に学生達が大学入学前までに受ける教育におけるジェンダーの問題点について考察し、まとめとする。

1. 女子学生達の日常とジェンダー

シモーヌ・ド・ボヴォワール（1908-1986）の有名な言葉に、「人は女に生まれるのではない、女になるのだ²⁾」があるが、この「なる」という言葉に注目すると、女子学生達は、普段「女性」という性をまとい、性規範³⁾の中での「女性」になっている、つまりは「女性」を演じていると推測出来る。更にこれを支える議論として中西祐子は、『演じられるジェンダー』の中で「最近、よく使われる言葉に『キャラ』という言葉がありますが、要するにジェンダーも一種の『キャラ』の演出といえるのです。』⁴⁾とある。つまりは、女子学生達は演技の授業に参加する際、まずそもそも「ジェンダー」を演じている、つまり女子学生ならば「女性」というキャラを演じながら、授業に臨んでいると仮定することが出来る。

2. 「キャラ」と「キャラクター」の差異について

ではここで先述した「キャラ」という言葉と、更に元々の語源と考えられる「キャラクター」という言葉について、その二つの単語の意味を、果たして単に「キャラ」は「キャラクター」の略語なのかということから考える。

現代の日本では「キャラ」と「キャラクター」という言葉は別々なものであるという考えがあり、相原博之は『キャラ化するニッポン』の中で「キャラ」という言葉は単純に「キャラクター」という言葉の省略形ではなく「キャラ」という言葉独自の意味合いが出来ていると述べている⁵⁾。また相原が指適している様に、この「キャラクター」と「キャラ」の差異について、マンガ評論家の伊藤剛は『テヅカイズデッド』の中で以下の様に説明している。「キャラ」というのは「多くの場合、比較的簡単な線画を基本とした図像で描かれ、固有名で名指しされることによって（あるいは、それを期待されることによって）、『人格・のようなもの』としての存在感を感じさせるもの」とし、一方「キャラクター」の方は「『キャラ』の存在感を基盤として、『人格』を持った『身体』の表象として読むことができ、テキストの背後にその『人生』や『生活』を想像させるもの」としていて、『キャラクター』は『登場人物』と対価な意味として扱われるが、『キャラ』はそうでもない」としている⁶⁾。相原は

これを「つまり、キャラはキャラクターの略語でも、キャラクターから派生的に生まれた概念でもなく、キャラクターに先立って存在していたものだというのである」⁷⁾とまとめている。

先述した中西の「ジェンダーも一種の『キャラ』」という考えをこの「キャラ」・「キャラクター」の差異に当てはめ、演技の授業に参加している女学生を分析してみると、確かに彼女達は、教室に学生としている時点では全く別人の誰か（キャラクター）を演じているわけではない。その証拠に、授業の始めに自己紹介をさせると、履歴書通りの人物であると述べ、全く別人として存在しているわけではない。当たり前にも聞こえるが、つまりは架空の「キャラクター」を演じているわけではない。演劇における登場人物（キャラクター）を演じるまでは素の学生本人だが、この本人がそもそも1.の項目で述べた「日常でジェンダーを演じている」ということを一緒に考えると、学生達は教室にいる時点ですでに「ジェンダー」という「キャラ」は背負っていると考えることが出来る。そして更に演劇の中の登場人物（キャラクター）を演じるということである。

3. 日常の「キャラ」と演劇の「キャラクター」

では次に前出した「キャラ」と「キャラクター」という言葉の定義を受け、実際演技の授業ではどのようなことが起きているのか考察していく。

演劇には、「登場人物」が存在する場合、演じ手（演技の授業において学生がこの「演じ手」となる）はその「登場人物」を演じる。この場合、その登場人物（わかりやすい例を挙げれば、ハムレットや、ロミオやジュリエット）にはそれぞれの人生がある⁸⁾。よって上記の「キャラ」と「キャラクター」の差異を考えれば、芝居に出てくる「登場人物」は辞書通り「キャラクター」と考えられる。演技の授業では、こういった「キャラクター」を演じる。つまりはこの場合、女子学生達は、日常の「キャラ」を背負ったまま「キャラクター」を演じている、という演技の二重構造を見つけることが出来る。（図1参照）

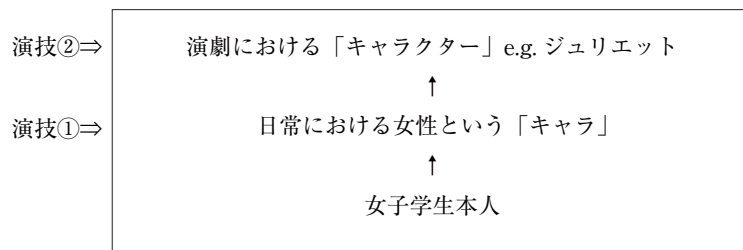


図1 演技における二重構造

4. 「かわいい」という文化

これまで、「キャラ」「キャラクター」をキーワードに女子学生達のジェンダーと演技構造を述べてきたが、ここで更に「かわいい」というキーワードを追加し考察していく。

演技の授業を通して感じた女子学生の演技の特徴の一つに、彼女達の価値基準に「かわいい」ということが非常に大きな位置を占めている点を挙げる事が出来る。「かわいい」ということに関して、上野千鶴子は、女は「かわいい」という言葉を生存戦略⁹⁾のために使っており、「かわいく」あることが女としての死活問題であると論じている¹⁰⁾。このことから半ば強引かもしれないが、かわいい＝女性性(ジェンダー)という価値構造が見出せるとしよう。またジェンダーが「キャラ」であるならば、

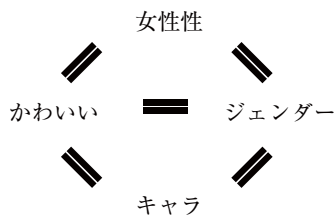


図2 「女性性」と「かわいい」の関係

かわいい＝女性性＝キャラとつながり、女子学生達の「キャラ」には「かわいい」が結びつけられていると推測することが出来る。(図2参照)つまり、女性として存在することは、かわいく存在する、ということである¹¹⁾。

これを傍証するような出来事として、授業の際、演技をしている女子学生を、見ている女子学生が、「かわいい」と褒めることがあった。決して「かわいい演技をしなさい」という指示での演技ではないのに、「かわいい」という価値観で評価をするのである。例えば、「大きな声を出す」「物を拾う」「力いっぱい怒る」などという演技課題を指示した際、その課題の目的と反して、例え小さな声でも、独創的に物を拾えなくても、明らかに怒っていない様に見えても、その演技が「かわいい」と感じると、見ている学生達が「かわいい」と評して、受け入れてしまう雰囲気が出ることもあった。

つまりこの様な例から「かわいくしなさい」という指示がない中でも「かわいく」いることが彼女達の中で価値のあるものとされていることが読み取れる。ここから、演劇の中で与えられた登場人物(キャラクター)になる前に、ジェンダーという「キャラ」、しかも「かわいい」というキャラが女子学生達の中で基盤として存在しているのではないかということに気付いた。更に四方田犬彦は『「かわいい」論』の中で、女子学生達が「かわいい」ということがメディアを通してみずからの「かわいい」観を形成し、メディアが差し出す規範の人格に同一化を試みたりする¹²⁾。と述べている。つまり彼女達は共通認識としてお互い「かわいい」とは何かを捉えており、そこにはまることに価値を見出していると考えられる。

5. 高等教育までのジェンダー差別とその影響

では何故、彼女達は演技の授業の中でもこの様な日常的な「キャラ」を背負っているのか、また背負ったままなのか。この課題を考えるにあたって、大学入学以前までの教育の中でのジェンダーについて視点を向けてみる。

「隠れたカリキュラム」¹³⁾という表現があるが、学校教育の中で男子と女子の教育の違いが存在すると言われている。井谷恵子は、『学校体育とジェンダー』の中で体育時のダブルスタンダードについて述べており、体育の授業では男女で達成基準が大きく異なることが多いとしている¹⁴⁾。

演技の授業は、体育の授業と同様、身体を動かすことが基本である。私服から稽古着に着替え大きな声を出す、走る、叫ぶ、わめく、怒る、泣くなど、体と声を中心に様々な身体の使い方を。この様な授業での基本の練習においては、男子学生用、女子学生用とメニューを変えることを私はしていないが、もし、高等学校までの体育の授業の中で潜在的に男子生徒と女子生徒の達成基準は違うのだということが学生の中にあるとしたら、彼らはその規範の中で行動しようとしているのではないかと考えられる。

例えば、Judith Lynne Hannaは、これまでの先行研究を元に、男性と女性の動きのステレオタイプを表にしているが、それによると、男性の動きは、大きくジェスチャーをし、腕と手は一体として動

くとあり、女性の動きは、小さいジェスチャーで指、手首、腕がもっと動く、などである¹⁵⁾。もし、こういったことが学生達が持つ性規範の中にあるとしたら、「大きく動きなさい」と男性的な動きを求められた時、性規範内で行おうとしている可能性がある。それは、女子学生ならば女性らしく大きくするという、つまり、かわいらしく大きくする、といった具合である。

演技の授業の中で、クラス全体で「しっぽとり」というゲームを行うことがある。これはズボンにリボンやタオルをはさんでしっぽにし、お互いに取り合う、という鬼ごっこの様なゲームで、半ば勢いを持って相手のテリトリーに入り込み、素早くしっぽを取ることが必要となる。ゲーム前半、たくさんの学生が追い、追われつつしている時より、最後女子学生が二人だけ残り一騎打ちになってしまった場合、他の学生が周りで見ているという状況になると、なかなか二人とも手を出そうとしない。相手の後ろに回り込んでしっぽを取れば終わりなのに、一向にお互い距離を保ってニコニコしている状況は珍しくない。このゲームの目的は、演技における身体の俊敏性や、積極性、意外性、インプロビゼーション（即興で演技を行うこと）の訓練でもある。どの様に相手に対してアクションをしかけていくかがポイントである。そういった状況とわかっている、女子学生にとって、人前で戦う、俊敏に人の裏をかくという行動をするといったことが、男子学生に比べて難しい様にした。こういったことも、女子学生達が大学入学以前に与えられた性規範の中で授業の際も行動しているのではないかと考えられる要因でもある。

6. 学生達の「意識」

さてこれまで学生達が、ジェンダーというキャラを背負ってその性規範内で授業に参加しているのではないかという仮説に基づいて議論を展開してきたが、ここで、では実際に学生達は自分達のジェンダー、そして「キャラ」をどう考え、捉えているのか、ということに注目していく。前出の中西は、学校での生徒同士のジェンダー意識について以下のように述べている¹⁶⁾。

生徒同士のやりとりを通じても社会のジェンダー構造は強化され再生産されています。ピアグループ内での「からかい」や、ときには「仲間はずれ」のような行為を通して「望ましい女性像/男性像」から外れた生徒は排除され、「望ましい」とされる規範への同調行動がうながされるのです。

ところでもし、学生達がこういった意識を持って大学に入学し、演技の授業を受けているとすると、教員から指示された演技の内容が彼女達が「望ましい」とするジェンダーの規範から外れていた場合、演技をする中で抵抗が生じるのではないかと考えられる。また前記した様に、指示された演技の内容を中西の指摘する「望ましい」ジェンダー規範内で行おうとするのではないかということも考えられる。更に、土井隆義は『キャラ化する/される子どもたち』の中でこう述べている¹⁷⁾。

若い人たちは、グループのなかで互いのキャラが似通ったものになって重なりあうことを、「キャラがかぶる」と称して慎重に避けようとします。それは、グループ内での自分の居場所を危険にさらすからです。しかし、グループ内に配分されたキャラからはみ出すことも、また同時に避けようとします。それもグループ内での自分の居場所を危険にさらすからです。

この説を演技の授業に置き換えて考えてみると、「グループ」を「クラスメート」と置き換え、「キャ

ラ」を「ジェンダー」捉えたなら、やはり、そこからはみ出さないようにしているのではないかと考えられる。

以上の事柄から、学生達、特に入学したばかりの一年生達にとっては、今までのジェンダー規範の中からはみ出すことは容易ではなく、むしろジェンダー規範内で与えられた課題に取り組んでいるのではないかと推測出来る。

7. 「キャラ」を背負ったまま「キャラクター」を演じるということ

次に、3で取り上げた「演技の二重構造」について、今までの議論を踏まえ更に追求していく。土井は「キャラクター」と「キャラ」の考察で着せ替え人形のリカちゃんの以下の事例を挙げている¹⁸⁾。

平成に入ってからのリカちゃんは、その物語の枠組から徐々に開放され、現在はミニーマウスやポストペットなどの別のキャラクターを演じるようにもなっています。自身がキャラクターであるはずのリカちゃんが、まったく別のキャラクターになりきるのです。

つまり土井はキャラクターであった「リカちゃん」が「キャラ」化していることを示しているという。ここに注目し、更に考察を加えるとすると、「ミニーマウス」になった「リカちゃん」はあくまでも「リカちゃん」としてのかわいい顔を維持している。跡形もなく「ミニーマウス」になっているわけではない。この「リカちゃん」の顔に「ミニーマウス」の耳がついた様子を、女子学生達が「かわいい」というキャラを存続したまま、お芝居の中の登場人物になろうとしている様子に類似性が見出されはしないだろうか。つまり何を、どんな役をやっても「かわいい」という規範は存続していくという形である。

おわりに

以上の考察から、女子学生達は日常で「かわいい」という女性性を示す「キャラ」を保持しながら、演技の授業に参加している、言わば演技の二重構造が存在する、という考えを導くことが出来る。そしてその背景には、大学入学前の教育においてや、友人関係の中での隠れたルールが影響しているのではないかということも考察した。今後の研究の課題としては、実際に意識調査や、細かい演技の身体的な動きから何が「かわいい」のか、その演技における「身体」の構造の分析を行うことである。

また今回は、女子学生におけるジェンダーを取り上げたが、同時に男子学生のジェンダーも視野に入れなくてはならない。男子学生は自分達のジェンダーをどう捉えているかも興味深い。また研究対象として、演技の授業の中で、女子学生が男性を演じてもさほど笑いは起きないが、男子学生が女性を演じると笑いが起きる確率が高い。これは何故なのか、「演じる」ということと「ジェンダー」ということをキーワードに更なる追求をしていく。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 25870742 の助成を受けたものです。関係各位に感謝申し上げます。

注

- 1) ウィリアム・シェイクスピア、小田島雄志訳『お気に召すまま』白水社、1983年、74頁
- 2) ボーヴォワール、『第二の性』を原文で読み直す会訳『[決定版] 第二の性Ⅱ 体験（上）』新潮社、2001年、12頁
- 3) 「『女はこうあるべき』『男はこうしなきゃ』といった性に関する人々が共有している約束事を、性規範（ジェンダー・ノーム）と呼びます。」千田有紀「ジェンダーをとらえなおす」『ジェンダー論をつかむ』千田有紀他著、有斐閣、2013年、15頁
- 4) 中西祐子「演じられるジェンダー」『ジェンダー論をつかむ』千田有紀他著、有斐閣、2013年、115頁
- 5) 相原博之『キャラ化するニッポン』講談社、2007年、120頁
- 6) 伊藤 剛『テヅカ イズ デッド ひらかれたマンガ表現論へ』NTT出版、2005年、94-97頁
- 7) 相原博之、前掲書、122頁
- 8) 登場人物がない演劇、また登場人物が存在してもその人物には「人生」がない演劇など、様々なジャンルの演劇は勿論存在するが、今回は生きている人間が登場人物として出てくる一般的にイメージしやすい演劇に限定して述べている。
- 9) 上野曰く、日本には、年寄りと子どもを同一視する、翁童文化という文化装置があり、女性の場合「かわいいおばあちゃんになりたい」などと、「かわいい」おばあちゃんになれば、他人に頼って生き延びられるという生存戦略として使われているとし、かわいければ、めんどろをみてもらえる、かわいければトクをするといったように、「かわいい」ということは、女が生存戦略のためにずっと採用してきたことばであるとしている。上野千鶴子『老いる準備 介護することされること』朝日新聞出版、2008年、29頁
- 10) 上野千鶴子『老いる準備 介護することされること』朝日新聞出版、2008年、29-30頁
- 11) 逆に「女らしくない」と言われる行動を一般的に考えてみると、がさつな動き、大雑把などが思い浮かび、「かわいい」行動とは言えないものが多い。それを考えると、では戻って「女らしい」行動とはと考えると「かわいい」と言えるかもしれない。
- 12) 四方田犬彦『「かわいい」論』三松堂印刷、2006年、152頁
- 13) 隠れたカリキュラム（hidden curriculum）とは、「学校で学ぶべき知識体系として明文化され、公的に認識されているカリキュラムに対して、言明されることなく潜在的なレベルで伝達されるカリキュラムを指す。」また隠れたカリキュラムには、性差別的な価値観（男子優先など）も存在すると言われている。木村涼子「隠れたカリキュラム」『岩波女性学事典』井上輝子他編、岩波書店、2002年、68-69頁
- 14) 井谷恵子「学校教育とジェンダー」『ジェンダーで考える教育の現在 フェミニズム教育学をめざして』木村涼子、古久保さくら編著、解放出版社、2008年、52-53頁
- 15) Hanna, J. L. 『DANCE, SEX and GENDER』The University of Chicago Press、1988年、161頁
- 16) 中西祐子「かくれたカリキュラム」『ジェンダー論をつかむ』千田有紀他著、有斐閣、2013年、95頁
- 17) 土井隆義『キャラ化する/される子どもたち 排除型社会における新たな人間像』岩波書店、2009年、11頁
- 18) 同書、22頁